

子どもの虐待に対する高校生の 意識と意識形成の世代伝播

佐藤幸子¹⁾・遠藤恵子¹⁾・塩飽 仁²⁾・矢本美子¹⁾

Attitude toward child abuse of high school students

Yukiko SATO¹⁾, Keiko ENDO¹⁾, Hitoshi SHIWAKU²⁾, Yoshiko YAMOTO¹⁾

Abstract :

Background : As a preventative measure against child abuse, it is important to understand the attitude toward child abuse of high school students about to enter an age of potential parenthood.

Purpose : The purpose of this study is to investigate the attitude toward child abuse of high school students.

Subjects : The sample population consists of 233 high school students and 213 their mothers and 186 their fathers.

Method : The students were given a questionnaire accompanied by a written request for the study. The students were asked to complete the questionnaire and to return it to the high school. All students were informed of their right to decline to participate in the study. The questionnaire included the Assessment Standard for Child Maltreatment (ASCM) .

Results : The mode score was "3" for 13 of the 39 vignettes indicating that a high percentage of the students did not consider these 13 vignettes as portraying child abuse. Their parents were more concerned about child abuse than high school students. The Pearson correlation coefficient showed significance between high school students' ASCM and their mothers' ASCM.

Discussion : The behaviors that the subjects did not regard as child abuse might have serious consequences for any future children that they may have. It is important to consider approaches to alter the attitude of teenagers toward such behaviors.

Key words : attitude, child abuse, high school students

はじめに

日本において子どもの虐待に関する相談が急増している¹⁾。Kempe, H.²⁾は虐待の定義を「親や保護者や世話をする人によって引き起こされた、子

どもの健康に有害なあらゆる状態」としており、子どもの健康状態への影響が考慮されている。虐待は身体的、心理的、性的虐待およびネグレクトに分類され、子どもに与える影響も外傷、発育不良や情緒・行動異常など多岐にわたる³⁾。服部⁴⁾は

1) 山形県立保健医療大学 看護学科
〒990-2212 山形市上柳 260
Department of Nursing, Yamagata Prefectural University
of Health Science
260 Kamiyanagi, Yamagata 990-2212, Japan

2) 山形大学医学部 看護学科
〒990-9585 山形市飯田 2 丁目 2-2
Department of Nursing, Yamagata University School of
Medicine
2-2-2 Iida Nishi, Yamagata 990-9585, Japan

虐待の心理的影響として虐待に伴う直接の恐怖や苦痛, 愛着関係の成立の障害, 落ち着きのなさや攻撃などの情緒・行動障害, 言語, 精神発達の遅れ, PTSD や人格障害をあげている。亀岡⁵⁾も精神医学的問題として自傷・他害, 反社会的行動, 登校・学習上の問題, 食行動異常などをあげている。精神症状を引き起こす虐待の症例報告も多く⁶⁾⁷⁾, また John H⁸⁾は, 精神科を受診する患者は, 他の科を受診する患者より, 身体的虐待や性的虐待を明らかに多く受けていることを報告している。このように虐待は重大な影響を子どもに及ぼすことを私たちは重く受け止め, 子どもの権利を守り, 児童虐待の予防を推進することが重要である。

虐待の予防には専門家間のネットワークの充実に加えて, 一般の人々の虐待に対する認識を高めることが必要であるといわれている⁹⁾。これまで虐待に対する認識については, 庄司ら¹⁰⁾がビネットによる調査表を作成し, 子どもに関わる専門職を対象として調査を行っている。その結果子どもに関わる専門職であっても虐待に対する認識が多様であり, 共通した枠組みがないことを指摘している。金澤¹¹⁾も山形県内の福祉・医療専門職を対象に調査し, 地域的な差があることを報告している。鈴木ら¹²⁾は大学生を対象に同様の調査を行い, 明らかに生命を脅かすような身体的なものや自己満足を目的とした性的なものは虐待と捉えていたが, ネグレクトや心理的なもので躰の一部と捉えられるものは, 虐待の認識が低いという結果であった。佐藤ら⁹⁾は乳幼児の父母に対して調査を行い, 心理的虐待やネグレクトで問題が顕在化していないものに対しては意識が低いことを報告している。以上のように専門職や一般の人々の虐待に対する意識は明らかにされ, 保健活動に役立てられてきているが, 次世代を担う若い人々の意識やそれに対する保健活動はまだすすんでいない。

以上のことから今回, 高校生を対象に「子どもの虐待に関する意識」の実態を明らかにし, 今後の保健活動に役立てていくために調査を実施した。子どもの虐待では世代間伝播が問題となっているため^{13) 14) 15)}, 父母の意識もあわせて検討した。

方 法

1. 対 象

対象は山形周辺の高校生 233 名とその母 213 名

および父 186 名である。高校生の性別は男子 45 名, 女子 183 名, 不明 5 名で, 平均年齢は 15.6 (± 0.6) 歳であった。母の平均年齢は 45.0 (± 3.3) 歳で, 父の平均年齢は 47.6 (± 3.8) 歳であった。

2. 調査内容

1) ビネット調査

ビネット調査とは短い事例文に対する回答を得て調査する方法であり, 今回は庄司ら¹⁰⁾が作成した 40 項目のうち, 庄司ら自身が答えにくい設定であるとした 1 項目を除いた 39 項目を使用した (表 1)。39 項目中身体的虐待に関するものは 8 項目, 心理的虐待に関するものは 10 項目, ネグレクトに関するものは 13 項目, 性的虐待に関するものは 8 項目であった。また, 1 項目につき A: 虐待や放任だと思ふか, B: 通告する必要があるか, C: 児童相談所の対応についての 3 つの質問があるが, 今回は A のみ回答を求めた。回答は「まったく問題ない」から「5 虐待または放任である」の 5 段階である。係数は 0.94 であった。

2) Parental Bonding Instrument (PBI 日本版)

虐待に対する意識形成の世代間伝播を検討するために, 養育された環境を測定するものとして Parker¹⁶⁾の作成した PBI の日本版¹⁷⁾を使用した。PBI は Protection (OP 因子) と Care (CA 因子) という 2 つの軸に関する 25 項目の質問からなり, OP 因子が高いほど over-protective であり, CA 因子が低いほど low-care であることを示す。尺度は 4 段階である。

3. 調査方法

調査期間は平成 12 年 1 月から 2 月である。調査用紙は自記式で, 高校の教員より質問紙を配布してもらった。質問紙には本人, 母, 父に同じ番号をつけ, それぞれ封筒に入れたものを, 大きな封筒に入れた。同時に調査の協力依頼書を同封し配布した。回収は高校の教員に依頼した。回収率は 91.0% であった。

4. 倫理的配慮

倫理的配慮としては, 調査の協力依頼書に目的とプライバシーの保護, 拒否できることを明記した。また, プライバシー保護のため, 氏名や名簿は一切使用せず, 番号で親子のマッチングを行った。また, 本人, 母, 父の質問紙を別々の封筒に入れて回収した。

表1 ビネット39項目と高校生，母，父の虐待・放任であるとした割合

ビネット	虐待・放任である(高校生) %	虐待・放任である(母) %	虐待・放任である(父) %	高校生の最頻値が5である項目	高校生の最頻値が3である項目	男女の比率に差の見られた項目	高校生の意識の高い項目	母の意識の高い項目	父の意識の高い項目
1. 親がパチンコをしている間、乳幼児を車に残しておく	48.1	57.9	51.1						
2. 罰として、子どもを夜中まで外に立たせておく	46.4	42.9	30.0						
3. 親の帰りが遅いため、子どもはいつも夕食を1人で食べている	6.0	10.7	7.7						
4. 乳幼児が泣いても無視して、抱っこしてあげない	31.3	12.9	15.9						
5. 夜、子どもを寝かしつけてから夫婦で遊びに出かける	10.3	27.9	22.7						
6. 親が思春期の異性の子どもと一緒に風呂に入る	7.3	3.0	4.7						
7. 子どもの腹を足で蹴り上げる	82.8	70.8	60.9						
8. 他のきょうだいと比べて「お前はダメだ」という	22.7	14.2	13.7						
9. 子どもが仲間をよんで飲酒しているのに、親は何も言わない	13.7	36.5	35.2						
10. 親の性的満足のために自分の性器を子どもに触らせる	63.9	57.9	52.8						
11. 親が子どもを叩いたが、けがやあざは生じなかった	18.5	15.0	14.2						
12. 子どもが嫌がるのに、年齢不相応な早期教育を強要する	16.3	11.2	14.6						
13. 親が洗濯をしないので、子どもはいつも不衛生な服を着ている	27.5	36.9	30.9						
14. 子どもにたばこの火を押しつける	83.3	81.1	68.2						
15. 太っているのを気にしている子に、親が「お前はいつ見てもデブだね」という	19.7	19.3	20.2						
16. 親が自分の好みで娘に露出度の高い服を着せる	11.6	13.3	19.7						
17. 親が18歳未満の子どもと性交する	49.4	63.1	53.6						
18. 幼児同士が刃物で遊んでいるのに止めない	42.5	57.9	45.1						
19. 親が子どもを叩いたら、医者による治療が必要な外傷が生じた	61.8	54.9	47.6						
20. 親が言葉かけをしないので、子どもの発達が遅れている	36.5	43.8	31.3						
21. 罰として子どもに長時間正坐をさせる	16.7	13.7	12.9						
22. 子どもが精神的に不安定なのに、専門的な診断や援助を受けさせない	21.0	31.3	24.9						
23. 親が思春期の娘の胸を愛撫する	60.1	63.1	52.8						
24. 子どもに「あんたなんか生れてこなければ良かった」としばしば言う	71.2	54.9	49.8						
25. 親がギャンブルにお金を使ったため、給食費が払えない	45.9	49.8	45.5						
26. 子どもの高熱を坐薬によって下げて、翌朝、保育所に連れて行く	8.6	6.9	9.4						
27. 子どもの話し掛けを一切無視して答えない	50.6	44.6	34.8						
28. 「殺してやる」と真剣な表情で包丁を子どもに突き付ける	83.7	79.4	67.0						
29. 親が酒に酔うと、子どもを叩いている	60.1	70.0	60.1						
30. 罰として、子どもの頭をつつつるに剃る	48.5	51.1	42.9						
31. 家出した子どもが帰ってきてても、家に入れない	24.9	36.1	23.2						
32. 親が子どもの性器を愛撫する	70.4	66.5	60.5						
33. 親が子どもの世話をいやがり、ミルクを与える回数が不足している	57.5	67.8	54.1						
34. 親が性交の様子なども含めて自分の異性体験について子どもに話す	7.7	21.5	23.6						
35. 罰として、子どもの大事にしていたおもちゃを捨てる	16.7	18.5	19.3						
36. 子どもに慢性疾患があり、生命に危険があるのに、病院に連れて行かない	80.7	76.0	66.1						
37. 親がカラオケなどで遊んでいて家に帰らず、食事を作らない	37.8	65.7	54.9						
38. 親が子どもを叩いたら、あざが出来た	39.1	41.2	34.3						
39. 親が子どもにポルノビデオを見せる	26.2	41.6	38.6						

HL

5. 分析方法

統計処理はSPSS11.0J for Windowsを用いて行った。男女間や親子間の比率の差を明らかにするためにカイ二乗検定を行い、親子間の相関を見るためにPearsonの相関係数を求めた。 $p < 0.05$ を有意水準とした。

結 果

1. 高校生の虐待に対する意識

各ピネットについて、虐待・放任であるとした高校生の割合は表1に示した。最頻値が5で虐待であるとの認識の高いピネットは39項目中21項目あった(図1)。最頻値が「不適切ではあるが虐待ではない」3であったピネットは13項目であった。この13項目のうち身体的虐待に関する項目はなく、心理的虐待5項目、ネグレクト4項目、性的虐待4項目であった(図2)。男女の比率で差が見られた項目は13項目で、心理的虐待が5項目、ネグレクトが4項目、身体的、性的がそれぞれ2項目でいずれも女子のほうが点数が高かった(図3)。

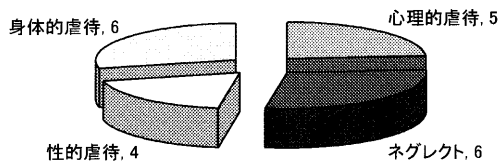


図1 虐待の意識の高い項目

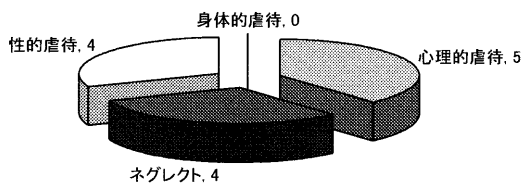


図2 虐待の意識の低い項目

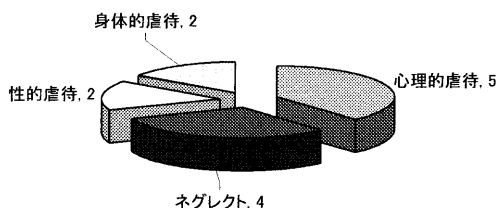


図3 女子の意識の高かった項目

2. 高校生と母、父の意識

高校生と母および父の意識の比率に差が見られた項目は26項目であった。高校生の意識の高かった項目は7項目で心理的が4項目、身体的2項目、ネグレクト1項目であった(図4)。母が意識の高かった項目は14項目でネグレクト8項目、身体的3項目、性的2項目、心理的1項目であった(図5)。父が意識の高かった項目は13項目で、ネグレクト4項目、性的4項目、心理的4項目、身体的1項目であった(図6)。

39項目の点数をカテゴリーごとの合計と全合計で、親子の相関について検討したところ、全合計

表2 高校生と母の意識の相関

	高校生 全合計	身体的	心理的	ネグレクト	性的
母全合計	**	**	**	**	**
身体的	*	**	*		
心理的	**	*	**	*	
ネグレクト	**	*	**	*	**
性的	**	*	**	**	**

* : $p < .05$ ** : $p < .01$

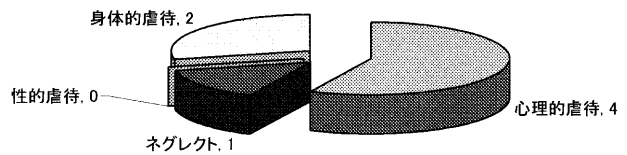


図4 高校生の意識の高かった項目

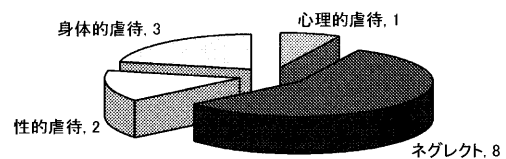


図5 母の意識の高かった項目

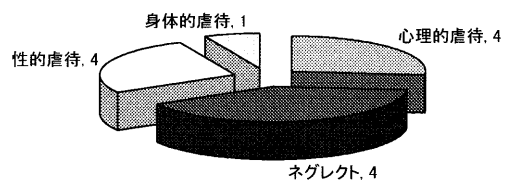


図6 父の意識の高かった項目

表3 高校生と父の意識の相関

	高校生 全合計	身体的	心理的	ネグレクト	性的
母全合計		*			
身体的		*			
心理的					
ネグレクト					
性的	*	*			*

* : $p < .05$

計で高校生と母に正の相関が見られ($p < 0.01$)、また、身体的($p < 0.01$)、心理的($p < 0.01$)、ネグレクト($p < 0.05$)、性的($p < 0.01$)虐待の各カテゴリー間にも正の相関が認められた(表2)。高校生と父の全合計に相関は認められなかったが、身体的($p < 0.05$)、性的($p < 0.05$)虐待について正の相関が認められた(表3)。

3. PBI との関連

PBIの結果は、母の母に対するCA因子と父の母に対するCA因子が標準より若干低かったがほぼ標準値であった。子どものピネット得点との関連では、ネグレクトと子どもの父に対するCA因子との間に正の相関が見られ($p < 0.05$)、また、父の母に対するOP因子とネグレクトの間に負の相関が見られた($p < 0.05$)。

考 察

今回高校生を対象に「子どもの虐待に関する意識」の実態を調査した。高校生の子どもの虐待に対する意識としては、最頻値が5である項目が21項目にわたり、6割以上が虐待・放任であると認識している項目が10項目であった。それらの項目は「子どもの腹を足で蹴り上げる」、「子どもにたばこの火を押しつける」、「(殺してやる)と真剣な表情で包丁を子どもに突き付ける」などであり、虐待の意識の低い項目に身体的虐待がないことから、身体的虐待は高校生には比較的理解しやすいと思われた。その半面、虐待・放任であると認識しているものが1割に満たない項目があり、その内容としては「親が思春期の異性の子どもと一緒に風呂に入る」、「子どもの高熱を坐薬によって下げて、翌朝、保育所に連れて行く」、「親が性交の様子なども含めて自分の異性体験について子どもに話す」などであった。心理的虐待、性的虐待、ネグレクトの中でも普段マスコミなどにできにく

い項目に対する意識は低いと考えられた。また、ピネットではどのような意図でそれらの行為が行われるのか、その脈絡がわかりにくいいため、このような結果になったことも考えられる。

男女の差では男子の方が意識が低く、特に「他のきょうだいと比べて『お前はダメだ』という」、「子どもに『あんたなんか生まれてこなければ良かった』としばしば言う」、「子どもの話し掛けを一切無視して答えない」など心理的虐待やネグレクトについて女子の方が意識が高かった。これについては女子の方が感受性が高いことも考えられるが、山形の地域性として、男の子どもは跡継ぎとして尊重されていることが反映したものと推測される。

また高校生・母・父の3者間の意識の差を見ると、母や父の意識の高い項目が多かった。高校生の意識が高いものとして「乳幼児が泣いても無視して、抱っこしてあげない」、「他のきょうだいと比べて『お前はダメだ』という」、「子どもが嫌がるのに、年齢不相応な早期教育を強要する」、「子どもに『あんたなんか生まれてこなければ良かった』としばしば言う」、「子どもの話し掛けを一切無視して答えない」など自分がそういう対応をされたら傷つくのではないかというような虐待を受けているという立場に立った反応であると考えられた。逆に親はそのような言葉を虐待とは意識せずにいることから、無意識のうちに使用していることも考えられた。筆者ら¹⁸⁾は心理的虐待やネグレクトにより小児神経症を引き起こした症例を報告しており、服部も述べているが、心理的虐待が子どもに与える影響は大きい。またKempe, H.²⁾の「親や保護者や世話をする人によって引き起こされた、子どもの健康に有害なあらゆる状態」という定義からしても、心理的虐待とその影響を、親に対しても周知するような方策が必要である。

逆に普段子どもを育児する立場にある母はネグレクトに対して意識が高く、父は比較的、性的虐待について意識が高いという結果であった。金澤¹¹⁾は福祉・医療専門職従事者に対しピネットによる調査を行っているが、それと比較しても、今回の結果では、高校生は福祉・医療専門職に比べてネグレクトや性的虐待に対する意識が低く、心理的虐待に対して意識が高いという結果であった。高校生に対してはネグレクトや性的虐待について、

それらが虐待であり, その影響を周知するような方策が必要である。

子どもの虐待に対する意識の親子間の関連については, 特に高校生と母の関連が強いことが明らかになった。渡辺¹³⁾は子どもの虐待の世代間伝播の頻度について約3割程度であると述べており, 森下¹⁵⁾も虐待的な育児態度も世代間伝播することを述べているが, 今回の結果からも虐待に対する意識形成が世代間伝播していることが考えられた。日常の会話や母のニュースに対する反応などが高校生の意識に影響すると推測でき, 日常的に虐待に対する正しい知識などの情報提供活動の必要性が示唆される。

また, PBIの結果からは父に保護的に養育されたと感じている高校生はネグレクトに対する意識が高く, 父が父の母から過干渉に養育されたと感じている高校生のネグレクトに対する意識が低いことが示されたが, これに対しては子どもの意識に対する親子間の関連を見た先行研究は見当たらないため, 文献検討はできないが, 養育環境が子どもの虐待に対する意識の形成に影響を与えていることが示唆された。これらのことから高校生の子どもの虐待に対する意識を高めるためには情報提供活動を行うと同時に, 適度に保護的に養育されることが重要であると考えられた。

今回は男子の対象が少ないため, 男女別の親子間の関連は見ることができず, 結果の解釈にも限界があった。今後男子の対象を増やして検討していきたい。

終わりに

今回の調査で, 高校生の子どもの虐待に対する意識の傾向として, 心理的虐待に対しては意識が高いが, ネグレクトや性的虐待に対しては虐待としての意識が低いため保健活動の必要性が示唆された。次世代を担う若者が虐待を正しく認識することによって虐待の予防が推進されると考えられた。

最後にこの研究にご協力いただきました。高校生ならびにご両親様, 高等学校の教員の皆様から心より感謝申し上げます。

文 献

- 1) 庄司順一：子どもの虐待．母子保健情報 42：8-22, 2000．
- 2) Schmitt, B. D. & Kempe, H. : The Pediatrician's Role in Child Abuse and Neglect. *Current Problems in Pediatrics*, 5 : 3-47, 1975 .
- 3) 諏訪城三：被虐待児 117 例の検討 臨床所見および虐待の背景について ．日本小児科学会雑誌, 99 : 2069-2077, 1995 .
- 4) 服部陵子：精神科から見た子どもの虐待．熊本医学会雑誌, 73 : 166-171, 2000 .
- 5) 亀岡智美：被虐待児の精神医学．臨床精神医学, 26 : 11-17, 1997 .
- 6) 中村曜子, 加藤温, 白波瀬丈一郎：被虐待体験により長期にわたり解離性同一性障害を呈した境界性人格障害の 1 症例．臨床精神医学 28: 1405-1409, 1999 .
- 7) 堀史朗, 岩谷泰志：被虐待の既往を持つ成人症例をめぐって 臨床精神医学 26 : 33-37, 1997 .
- 8) John, H. C. & Sarah, H. T. : Sexual and Physical Abuse of Chronically Ill Psychiatric Outpatients Compared with a Matched Sample of Medical Outpatients. *The Journal of Nervous and Mental Disease*, 188 : 440-445, 2000 .
- 9) 佐藤奈保, 内田雅代, 竹内幸江, 栗林浩子, 篠原玲子, 北山三津子, 俵麻紀, 河原田美紀, 御小柴裕子, 吉沢豊予子, 北山秋雄, 南信子, 子どもの虐待防止研究会：長野県 K 市における乳幼児をもつ両親の「子どもの虐待」の認識の実態．長野県看護大学紀要, 1 : 55-63, 1999 .
- 10) 高橋重宏, 庄司順一, 中谷茂一, 山本真実, 奥山真紀子, 加部一彦, 加藤純, 才村純, 北村定義：「子どもの不適切な関わり(マルトリートメント)」のアセスメント基準とその社会的対応に関する研究(3) .日本総合愛育研究所紀要 33: 127-141, 1997 .
- 11) 金澤まゆみ：山形県内陸地域における福祉・医療専門職者の「児童虐待」の認識と実態調査．山形大学平成 11 年度卒業論文集 : 93-98, 2000 .
- 12) 鈴木祐子, 木村恭子, 刀根洋子, 及川裕子：子ども虐待の認識 ビネット調査を試みて ．日本赤十字武蔵野短期大学紀要 ,14:53-66 2001 .
- 13) 渡辺久子：虐待の世代間伝達を断ち切る．助産婦雑誌, 52 : 674-680, 1998 .
- 14) 妹尾栄一, 大原美知子, 萱間真美, 永雅子, 吉村奏恵：一般人口における児童虐待の実態 家族環境とのかかわり ．アディクションと

- 家族，16：459-469，1999．
- 15) 森下典子，山田重行，福島富士子：虐待的な育児の世代伝播とアダルト・チルドレン．母性衛生，41：69-75，2000．
- 16) Parker, G., Tupling, H. & Brown, L. B. : A Parental Bonding Instrument. British Journal of Medical Psychology, 52 : 1-10, 1979 .
- 17) 小川雅美：PBI (Parental Bonding Instrument) 日本版の信頼性，妥当性に関する研究．精神科治療学，6：1193-1201，1991．
- 18) 佐藤幸子，塩飽仁：不定愁訴の子どもと被虐待経験を持つ母に対する看護介入の分析．第5回北日本看護学会学術集会抄録集：80，2001．2002. 10. 31. 受稿，2002. 12. 16. 受理

要 約

目的：高校生を対象に子どもの虐待に関する意識の実態および虐待に対する意識形成の世代間の伝播について明らかにする。

方法：対象は高校生 233 名とその母 213 名および父 186 名である。調査内容は庄司らが作成したピネット調査および Parental Bonding Instrument (PBI 日本版) で，調査方法は高校の教員より自記式質問紙を配布・回収してもらった。倫理的配慮としては，調査の協力依頼書に目的とプライバシーの保護，拒否できることを明記した。

結果：虐待であるとの認識の低いピネットは 13 項目であった。高校生と母および父の意識の比率に差が見られた項目は 26 項目で，父と母の意識のほうが高校生より高かった。高校生と母の全得点の合計間に正の相関が見られ，各カテゴリー間にも正の相関が認められた。高校生と父の意識に相関が認められた。

考察：子どもの虐待に対する高校生の意識の傾向として，心理的虐待に対しては意識が高いが，ネグレクトや性的虐待に対しては意識を高める保健活動の必要性が示された。

キーワード：高校生，子どもの虐待，意識